

# スコットランドの自治都市学校

田 口 仁 久

## The Burgh Schools of Scotland

Yoshihisa TAGUCHI

### Abstracts

Towards the end of the fifteenth century, Schools for Latin were planted in every considerable town in Scotland. Many of them conducted by the Church in course of time became the school of the burghs in which they were situated. The Reformation in 1560 nearly completed the transference of the patronage of the grammar schools from the Church to the burgh.

Originally burgh schools' distinctive sphere were to give instruction in grammar and language- especially Latin. But, burgh schools in mid-Victorian Scotland were no longer obsessed by the classics and they were largely the preserver of the commercial middle class.

### はじめに

1603年の王室連合 Union of Crowns に次ぐ 1707年の議会連合 Union of Parliaments によって、イングランドとスコットランドの正式な合邦が成就された。しかし、それまで長期間にわたってイングランドと異なる歴史的発展のコースを歩んでいたスコットランドは、上の合邦以後においてさえ、「大ブリテン島の単なる一地方ではなかった<sup>1)</sup>。」本稿は、そのスコットランドの教育史に関する一考察である。具体的にいえば、教区学校 Parish or Parochial School とともに、「スコットランド教育史上きわめて重要な役割を演じた」自治都市学校 Burgh School<sup>2)</sup>の考察である。

### I 自治都市による保護と学校生活

スコットランドにおいては、12世紀初めから設立され出していたといわれる「ラテン語のための学校 Schools for Latin<sup>3)</sup>」つまり文法学校が、15世紀末までかなり広く普及していた<sup>4)</sup>のであるが、それらの学校は、ローマカトリック「教会の管理下におかれ、司教座聖堂、修道院およびその他の国内宗教施設と緊密に結びつけられていた<sup>5)</sup>。」だが、教会に学校の建築・維持費や教師の俸給などを負担する能力が乏しかった

ために、そのほとんどすべてを自治都市に、すなわち、国王の特許状によって内外の商業特権を与えられた12世紀以来の共同体<sup>6)</sup>に依存することが、当初からの通例になっていた。たとえば自治都市エジンバラのハイスクールと呼称される文法学校は、同市ホルルド大修道院に管理される学校であったが、その校舎は市によって建てられたもので、教師の俸給も市の会計から支出されていた<sup>7)</sup>。

このような事情からすればだし必然の成行きというべきであろうが、自治都市は、やがて、管内文法学校の教師任命権さらには学校の全面的管理運営権を要求し始め、教会の強い抵抗を受けながらも文法学校に対する教会の権限を蚕食するようになった。しかもこの傾向が、16世紀に入って、当時のスコットランドにおける自由精神の高揚を背景に、自治都市が「大いに攻め立てられているとはいえ、なお強大な教会権力に対してさえ大胆な姿勢を示す勇氣を持ち出した<sup>8)</sup>」ことによって、著しく促進された。かくして、スコットランドにおいては、ローマカトリック教会が長老派教会 Presbyterian Church に取って代わられる1560年の宗教改革までに、既存文法学校のほとんどすべてが、実質的権限ごとくを自治都市に握られて、その参事会に管轄される市立文法学校すなわち自治都市学校に化されてしまっていた<sup>9)</sup>。そして宗教改革後には、最初からそれとして設立される自治都市学校もいや増したのである<sup>10)</sup>。

宗教改革後7年目に国会の承認をえてスコットランドの国教会となった長老派教会は、学校が教師を任命する際に、教師候補者に対してあらかじめ国教会の信仰告白 Confession of Faith への署名を強制する法的権限を手中にしていた。そしてその権限は、自治都市学校にまで及ぶものとされていた。しかるに、自治都市の多くは、1861年に同年の教区・自治都市学校教師法 Parochial and Burgh Schoolmasters Act に基づいて上の権限が無効とされるずっと以前から、それをもしばしば無視して、信仰告白に署名していない者を管下の文法学校教師に任命し、任命権者が市であることを教師に印象づけようとさえしていた。市の参事会が教師に校舎とかれらの宿舍との鍵を返還させ、その後信任する旨を伝えつつ鍵を改めて教師に手渡し儀式を毎年挙行することが、古来自治都市学校一般の慣例になっていた、といわれている<sup>11)</sup>のである。

スコットランド自治都市の「参事会は、管下の文法学校を強烈な誇りの対象とすることがしばしばで、その評判を他都市のライバル以上に高めるためならば、できうるかぎり何でもしようとしていた」といわれている<sup>12)</sup>のであるが、それは、「管下の文法学校の威信と有用性とを擁護するために、また自治都市学校教師の信望と尊厳とを保持してその地位に学識者を招き寄せるために<sup>13)</sup>」私立学校を管内から締め出すことにも躍起になっていた。この締め出しに関する事例は、スコットランドの学校調査を目的に1864年に任命された王立委員会、いわゆるアーガイル委員会 Argyll Commission によって多数報告されている<sup>14)</sup>。それによると、エジンバラ市参事会は、早くも1519年に、同市市民がハイスクール以外の学校で息子にラテン語を学ばせることを禁じる条例を定めて、違反者にスコットランド貨10シリングの罰金を科していた。また同じ参事会は、参事会の認可を受けていない教師との競合があるために生徒が減少したとする、ハイスクール校長の訴えを認め、1665年にも、無認可教師が市内において文法教授を行うことと、市内および近郊の住民がハイスクール以外の学校に子どもを入学させることを、全面的に禁止する挙に出ていた。違反教師は科料もしくは禁固刑に処せられ、親の違反者はハイスクールが徴収していると同額の授業料を学期毎に同校校長に納入すべきこと、とさえされていた。その上、ハイスクールの校長には、上の禁止条項に背いている教師や親を摘発して、かれらの逮捕投獄を市参事会に要求する権限まで与えられていた。

このような厳しい措置にもかかわらず、禁を犯す教師や親は後を断たなかった。そこで1680年には、枢密院が、エジンバラ市内およびその近郊における私立ラテン語学校の開校禁止と、当該学校経営者に対する次のような宣誓の義務づけとを布告した。「署名によって氏名が明らかにされているわれら、市に義務を負うと同時にそこから恩恵を受けている市内のラテン語学校経営者は、子ども相手のラテン語学校経営とそれに伴う利益とを、次回の聖霊降臨祭までに断念放棄し、市参事会が相当と見なす刑罰下で、ラテン語教授もしくはそのための学校経営を今後われらの役目として引受けるべからず、とする枢密院布告に従う。」だが、枢密院の布告後も、一時的にはともかく、永久的に私立学校が鳴りを静めることはなかった。この間の事情は、1724年にいたってエジンバラ市参事会が改めて大要次のような決議を行っている事実から、端的に察しうるのである。私立学校は無秩序無規律であるがゆえに、自治都市学校にとって有害であるにとどまらず、青年全般の作法と教育にとっても有害である。したがって、参事会の認可を受けずに市内で教授を行うことを、何人に対しても許してはならない。認可を与える私立学校教師の数は、市内の子どもの数から判断して5名を限度とすべきである。このような決議が行われていたのであるが、付言するならば、スコットランドが生んだ大文豪スコット Scott, Sir W. に1792年に英語を教えていたリーチマン Leechman, J. は、上の決議に基づいてエジンバラ市参事会から認可された5名の私立学校教師中の1名であった、と伝えられている<sup>15)</sup>。

管轄する文法学校のために私立学校の締め出しに躍起になっていた自治都市は、エジンバラだけではなく。若干の例をあげるならば、エア市 Ayr は、1666年に、市立文法学校の校長およびかれの部下の教師 doctor 以外の者によるラテン語教授を、「鳴物入りで」禁止していた。ピーブルズ市 Peebles は、1658年に、スコットランド貨20シリングの罰金付きで、女性私立学校教師の男児に対する教授を禁止していた。ブレヒン市 Brechin は、1674年に、10歳以上の男児が自治都市学校を含む他都市の学校と市内の私立学校に入学することを禁止していた。ダンフリース市 Dumfries は、1767年に、無認可教師の活動を禁止して職を奪い、さらにその上、かれら「自身と家族の誰かが市の厄介者になった場合には英貨10ポンドの科料に処す」と定めていた。

さて、市参事会に篤く保護されていた自治都市学校

における学校生活の有様は、各校の学校規程 Directory からうかがい知ることができるのであるが、現存最古の自治都市学校規程と目されているアパディーン市 Aberdeen 立文法学校の 1553 年規程<sup>16)</sup>を見ると、まず同校の始業時間は午前 7 時である。登校直後に、生徒はひざまずいて祈りを捧げなければならない。午後 6 時の終業時にも、「全知全能の神」に祈りが捧げられる。朝の祈りが終わってから校長の最初の仕事は、指定された課業ができなかった生徒たちに対する、口頭もしくは鞭打ちによる折檻である。授業が 9 時まで続けられ、その後 1 時間が朝食の時間に当てられる。10 時から 12 時まで再び授業が続けられて、今度は昼食の時間となる。校長は、最上級生に対して、ときにはそれ以外の生徒に対しても、テレンス Terence、ヴァージル Virgil あるいはシセロ Cicero を毎日講義する。生徒は、4 時から 5 時の間に、その日の授業内容を担当教師の前で復誦しなければならない。5 時から 6 時までは、討論練習の時間である。規律は厳しい。下級生と新入生は、1 年間にわたって「ピタゴラスの沈黙 Pythagorean silence」に服することを命じられる。上級生は日常会話にも英語を使用することを禁じられ、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、フランス語あるいはゲール語 Gaelic の使用を強制される。運動は、教師の監督下でなければ許されない。上級生には皮ひも打ち leather thong 程度の遊びが許されるが、金品をかけられるような遊びはすべて御法度である。「悪事の張本人たち authors of the mischief」すなわち不従順な者、遅刻者、予習を怠った者、授業中に騒がしい者などには、懲罰が科される。

ビーブルズ自治都市学校の 1655 年規程<sup>17)</sup>によると、学校は午前 6 時に始まり、9 時から 10 時までの朝食時間と、12 時から 1 時半までの昼食時間とをはさんで、午後 6 時まで開かれている。火曜日と木曜日には 2 時から 4 時までの運動が許され、土曜日の午後は休業となる。学校の一日は朝の祈りと賛美歌で始まり、下校直前にも 15 分間にわたって祈りと聖書朗読、それに賛美歌斉唱が行われる。日曜日といえども休日ではない。日曜日には、校長が下級生を午前 8 時に招集して、かれらの日曜日の授業すなわち聖書と教義問答書の講義を、教会の 2 度目の鐘が鳴るまで続けなければならない。それから校長は、見苦しくなく整然と行列した全校生を引率して教会に行き、説教が行われている間静粛が保たれるように監視し、騒ぐ生徒を譴責しなければならない。かれは、午後 1 時に下級生を再度招集

して説論を行わなければならない。この説論終了後、かれは下級生を 3 度招集して、説教と日曜授業との生徒のノートを検閲しなければならない。なお、同じ学校規程には、教師が「市長の許可をえずに任務を放棄したり市外に出たりしてはならない」とする一風変わった条項も含まれていた。

エルギン Elgin 市立文法学校の 1649 年規程は、上記ビーブルズ自治都市学校規程に酷似しているのであるが、自治都市ダンバー Dunbar の 1679 年市立文法学校規程<sup>18)</sup>からは、教師に対する近代的な指示を読み取ることができる。「子どもが警告や威嚇によって言うことを聞かせられる者であるにしても、教師が言動を慎み鞭を控える方が子どものためによいのであれば、そのようにすべきことが教師に要求される。」

以上のように自治都市学校の学校規程に目を通して来ると、一日の学校生活が長いことや、朝 6 時といった始業時間の早さなどに驚かされるのであるが、グラスゴー自治都市学校の 1595 年における始業時間は、実に午前 5 時であった<sup>19)</sup>。エジンバラのハイスクールの場合には、17 世紀の半ば頃に、始業時間が午前 6 時から 7 時に繰り下げられ、同時に終業時間は繰り上げられた。そしてその後にも、始業時間の繰り下げと終業時間の繰り上げが実施された。しかしそれでも、同校の 1754 年における開校時間は、冬期が 9 時から 12 時までと 2 時から 5 時まで、夏期が 7 時から 9 時、10 時から 1 時、3 時から 5 時であった<sup>20)</sup>。19 世紀に入ると、自治都市学校における開校時間の短縮傾向が全般的傾向として認められるようになるのであるが、画期的なスコットランド教育法 Education (Scotland) Act of 1872 によってその歴史に終止符が打たれる 1872 年における、自治都市学校の月曜日から金曜日までの平均的開校時間は、午前 9 時から午後 3 時あるいは 4 時までの 6 ないし 7 時間であった<sup>21)</sup>。そして、その時間内において最も力を入れられていたのはラテン語教授であった。

## II 自治都市学校のカリキュラム

スコットランドの自治都市学校では、ギリシア語が、同じ古典語であるにもかかわらずラテン語に比べて著しく軽視されていた。たとえばダンディー Dundee 市立文法学校においてギリシア語教授が行われるようになったのは 19 世紀に入ってからで、グラスゴー自治都市学校にギリシア語クラスが開設されたのも 1815 年

のことであった<sup>22)</sup>。こうした状況の中で、エジンバラのハイスクールでは1614年に初級ギリシア語クラスが開設されていたのであるが、同校においてもその後すぐにギリシア語がカリキュラムから削除されていた。そしてそれ以後、校長アダム Adam, A. が着任早々の1766年にそれを再開する<sup>23)</sup>まで、ギリシア語教授が全く行われていなかったのである。ただ、エジンバラ市ハイスクールの場合には、ギリシア語教授に対するエジンバラ大学の抑制という特別の事情も考慮されるべきであろう。エジンバラ大学は、市内におけるギリシア語教授の独占をはかっていた。そして、アダムによってハイスクールのギリシア語教授が再開された際にも、その不当性を市参事会に対して次のように訴えていたのである。「われわれは、尊敬するわが保護者に対して、大学の発展に大いに関係し当市の教育計画に影響甚大であるので、貴下の速やかな対応と仲裁が必要な一件について報告いたします。10月初旬にハイスクール校長がギリシア語の初級クラスを開き、そのクラスにはかれの生徒の相当数が出席しています。本学のギリシア語クラスは、スコットランドの他大学のそれと同じく、初歩的クラスです。……校長の新機軸によって、大学の領分が侵害されていることと、ギリシア語担当教授が通常の教科課程に従って本来かれのクラスに出席するはずの学生を奪われていることとは、明白です。われわれは、市長の要請を受けた大学教授団によって定められた参事会条例で正式に承認されている、ハイスクールの教科課程に関する2規定を検閲しました。それらのいずれにおいても、ハイスクールはラテン語学校としか見なされておらず、先代までの歴代校長も自分にギリシア語を教授する資格があるとは誰一人考えていませんでした。……われわれは、市長と市参事会とが、大学とハイスクールとの双方の保護者なのですから、両教育機関の繁栄のために、両者間の衝突一切を止めることと、教師の独断による大学への侵害を許さず、かれが全ての時間と注意とを費やすのにふさわしいかれ本来の役割、すなわちラテン語教授に自分の役割を限定することとに、配慮されるものと確信しています<sup>24)</sup>。」

だが、ギリシア語が含まれるにせよ含まれないにせよ、スコットランド自治都市学校のカリキュラムはとにかく古典中心であった。しかも、自治都市学校はそのカリキュラムをかたくなに守っていた。

「市民と緊密につながっていたので、自治都市参事会は市の教育要求に精通していて、共同体が求める改良

あるいは改革に躊躇なく踏み切っていた」といわれている<sup>25)</sup>のであるが、商業の繁栄が日の出の勢いを示した18世紀半ばのスコットランドに、「初等段階以上の従来よりも近代的タイプの教育」に対する要求が持ち上がるべくして持ち上がる<sup>26)</sup>と、自治都市の中からは、すでに1723年以来のダンフリース市の先例にならって、とくに簿記や算数などに力を入れる商業学校を設ける所が現われた。スターリング市 Stirling (1747年)、バンフ市 Banff (1762年)、ペーズリー市 Paisley (1781年)がそれである<sup>27)</sup>。さらに、18世紀末から次世紀初めにかけてのスコットランドには、「諸外国語のみならず生活に何よりも役立つかの自然諸科学が、簡明かつ実際的な方法で教えられている」イングランドの非国教派アカデミー Dissenting Academy に範をとった実学的なアカデミー<sup>28)</sup>が、集中的に開設されていた。しかるに自治都市学校は、上のような状況下にあっても、古典中心のカリキュラムを改めようとしなかった。エジンバラのハイスクールの場合について述べると、同校では1827年までカリキュラムがほとんど全く改造されず、改造後においてもなおラテン語が最重視されていた<sup>29)</sup>。さらにグラスゴー自治都市学校の場合には、同市では、「つとに1700年に」市立文法学校の教育が日常生活から遊離しているという不満の聲が、一般市民の間から上がっていた<sup>30)</sup>のであるが、それにもかかわらず1816年までラテン語教授が専らにされていた<sup>31)</sup>。1746年に数学、航海術、測量術、物理学 Natural Philosophy および簿記などをカリキュラムに加えたエア市の市立文法学校<sup>32)</sup>は、きわめて特異な例外でしかなかったのである。

さらに、自治都市には初等教育を本来の役割とする教区学校が全く設立されていなかった<sup>33)</sup>のであるが、自治都市学校の中でいわゆる読・書・算をカリキュラムに加えていたのは、比較的小規模の自治都市の学校だけであった。エジンバラを筆頭とする規模の大きい自治都市では、読・書・算の教育が、とくにそれを目的としそれゆえに自治都市参事会による締め出しを免れた私立学校<sup>34)</sup>、たとえば講話学校 Lecture School や、宗教改革以前の唱歌学校 Song School に淵源する英語学校 English School<sup>35)</sup>に託されていたのである。

如上のようなカリキュラム面の実態からだけしても、自治「都市学校が設立された結果、都市においては、教会に頼らなくても、市民の教育需要は満たされるようになる」とする見解<sup>36)</sup>、つまり自治都市学校が所在市市民にかれらの欲する教育を十分に提供していた

とする見解は、承認し難いのである。ただ、スコットランドの自治都市学校も、いつまでも同じ状態でいたわけではなかった。自治都市学校の日がラテン語でふさがれていたのは、19世紀半ばまでであった<sup>37)</sup>。そしてヴィクトリア朝(1837-1901)中期には、自治都市学校における古典の衰退がおおい隠しようもない顕著な現実となっていたのである。

### III ヴィクトリア朝中期の自治都市学校

イングランドの学校調査を目的とするいわゆるタントン委員会 Taunton Commission の命によって、1866年から翌7年にかけてスコットランドの自治都市学校を実地に調査した同委員会の補助委員フィアロン Fearon, D.R. は、68年に提出した報告書の中で、自治都市学校をイングランドの文法学校と並べて両者の比較を試みている<sup>38)</sup>。学校視学官としての立場から後者と深いかかわりを持っていたフィアロンによるその比較は、調査実施当時における前者の実態を伝える確かな一資料として、引用に値するであろう。まずイングランドの文法学校では、「細長い教室の中央ががらんと空いていて、がっしりとした古くさい机が壁の周囲に並べられている。教師用の3脚の椅子には細心の注意をもって大小の差がつけられている。最も大きくて立派な教師用机は、教室の上席にすえられている。その次のは助教師 usher 用である。そして一方の側に、使いやすい点でも重々しさの点でも一段と劣る小さな机が、非常勤のフランス語教師用に置かれている。30名の男子生徒が名目的に6学年に編制され、6年生には『ギリシア戯曲』を講読中の寄宿生が3名含まれているのであるが、その中の1名は大学の公開奨学金試験に備えて準備中である。5年生は『目下在籍者なし』で、それ以下の学年の生徒は、ほとんどがユートロピウス Eutropius とシーザーおよびオウィディウスについての熟達度を基準に、学年分けされている。身なりがよく太った教師が、かれの立派な椅子にもたれかかって、無関心あるいは倦怠を感じさせるさまざまの態度でかれの周囲に座ったりかがみ込んだりしている『6年生』に、問題を出して答えさせている。助教師、無知で素人の辛抱人——寄宿生に対する寝室での世話と、『英語部門』の名で知られている程度の低い教科の指導を任されている——は、今よりもよい毎日を経験したことがあるか、それを徒らに待ち望んでいる者の、ものうげで生氣に乏しい気配を漂わせている。あらゆる

情景が、活気なく単調な者のそれである。ミューズたち Muses というよりは、むしろ聖職者とモーヒュース Morpheus 崇拜者たちとの集団である。」

一方、スコットランドの自治都市学校では、「60名あるいは100名の、全員がほとんど同年齢の男子と女子の大群が、列をなして机あるいは椅子に座っているのであるが、座席はすべて成績順である。かれらの鋭く注意深い顔は教師の方に向けられ、教室での席次を上げて、お茶の時間に両親に話すよい知らせを家に持ち帰りたいという希望から、教師の一挙一動に目が凝らされている。首席の生徒が教室の最上席に座り、ときにはメダルをかけている。かれは、仲間全員の羨望の的であるが誇りでもある。かれは、自分の地位の榮譽と不安定さを十分に心得ている。そして、多数の落下者を見聞きした経験から、一瞬たりとも努力を怠ることの危険を教えられている。このような真剣で生き生きとした大勢の前には、やせて骨ばり、身なりが古ぼけて粗末で、作法と話しぶりが無骨であるが、挙動に指導者らしい威厳を示し、目に情熱の炎を輝かせた教師が立っている。かれは、決して座らず、いつでもどこかクラスが見渡せる場所に立っている。せつせと動き回り精力的である。書物や担当教科についてきわめて深く精通しているので、かれには、左手に広げ持っている教科書を見る必要がほとんどない。右手には、地図か黒板を使っていつでも説明ができるように、チョークか指し棒を持っている。……あらゆる情景が、活気に満ちた行動と見事な説得力とのそれで、単調かつ散慢で生徒から注目されていないイングランドの教師の動作と、可能最大限のコントラストをなしている。」

ところで、フィアロンは、上の比較に先立って、スコットランドの親は、学校がかれらの欲するものを与えるがゆえに進んで高額の授業料を支出していると述べ、さらに次のように続けている。「スコットランドで学校が富裕者にだけでなく貧困者にも人気があるのは、学校が通学学校であるという事実<sup>39)</sup>に依拠している。それらが(概して)必修のカリキュラムを持たず、個々の親にそれぞれの履習教科の選択を許しているという事実<sup>40)</sup>に似拠している。科学と近代的諸教科にも、古典に対すると同様な正当の榮譽と注目を与える配慮に依拠している。さらに、基金の不足ひいては授業料に頼らざるをえない事情から教師たちの間に醸し出されている、すべての親に対する公平な熱意と旺盛な責任感とに依拠している。」そしてフィアロンは、親の気持



を汲むということ、イングランドの学校もスコットランドの学校から学ぶべきであると結論づけている<sup>39)</sup>のであるが、スコットランドの学校では、一定の必修カリキュラムを定めず、親にわが子の履習教科を自由に選択させて選択した教科にのみ、それぞれに定められた授業料を支払わせるという方式が、古くから習慣的に採られていた。そして自治都市学校の場合には、今日わが国でも注目されている教育切符 education voucher 制度を連想させる上の方式が、19世紀初頭にはも早や抜き難いものにされていたのである。

19世紀に入ると、「あたかも校長のように他からの干渉を嫌がる教師が多ければ多いほど、学校と世の中のためになる」という世論がなぜかスコットランドに強くなり、この世論に、さらに学寮制という「大学によって開かれた先例」も要因に加わって、自治都市学校は、ごく一般的に、「一匹狼的な教師が集まった小さな共和国」ともいうべき「学科 department」に細分化されるようになった。そして、通常は古典教師がその任に就いていた校長の権威が極度に失墜し、校長不在の学校さえ珍しくなくなった<sup>40)</sup>。このような成行きに伴って、自治都市学校では、カリキュラム編成も容易ではなくなり、生徒の親に、履習教科を選択させて選択分だけの授業料を支払う自由を、いやおうなしに認めざるをえなくなったのであろう。

それならば、ヴィクトリア朝中期の自治都市学校では、どんな教科が選択されていたであろうか。この点に関する調査は、フィアロンではなく、アーガイル委員会の補助委員ハーヴィ Harvey, T. とセラー Sellar, A.C. とによって実施されているのであるが、学校数 58 校、生徒数 14,079 名を対象にした、かれらの 1866 年から翌年にかけての調査の結果は、下表<sup>41)</sup>の通りであった。調査校のすべてで、しかも最も大勢の生徒に学ばれている教科は、ラテン語ではなく、文法、作文、文学さらには歴史と地理までも含む英語であった。このような調査結果は、ヴィクトリア朝中期における自治都市学校の利用者がきわめて実利的なスコットランドの中産階級であったことを、明瞭に裏付ける結果でもある。

スコットランドの中産階級は、「教育を即時的目的に対する一手段と見なしている。大目標は、金銭的利益がえられ自活できるような何らかの地位に、若者をできるだけ早い年齢の中にはめ込むことである。かれが、アパディーンにおけるように、古典という手段によってそうされうるのであれば、親はかれにラテン語を学

	学 校 数	生 徒 数
英 語	58	12,976
書 き 方	57	10,535
算 数	57	10,367
ラ テ ン 語	58	3,529
フ ラ ン ス 語	53	2,682
製 図	36	1,748
数 学	52	1,609
音 楽	10	1,227
簿 記	34	806
ギリシア語	44	801
ド イ ツ 語	29	554
物 理 学	8	487
化 学	3	146
博 物 学	2	124

ばせるであろう。書き方によってであるならば、それを学ばせるであろう。書き方に加えてラテン語とフランス語をわずかずつ覚えられれば、それに越したことはない。しかし、ラテン語などは必須ではない。これがスコットランドの中産階級の親が抱いている教育観である。そして、この目的達成に資する教科が、かれらに最も高く評価されているのである<sup>42)</sup>。」これはハーヴィとセラーの見解であるが、アーノルド Arnold, M. も、トーントン委員会に提出した補助委員報告書の中で、同様の趣旨を次のように指摘している。「スコットランドの中産階級は、広い教養 *la grande culture* という点では、イングランドの中産階級以上に出ていない。しかし、知的教養が産業上の価値を有する、人の職業活動を促進させる、かれの出世に役立つとなると、スコットランドの中産階級は、それを徹底的に評価してせつせと吸収する<sup>43)</sup>。」

由来スコットランド教育には民主的な伝統があった、この伝統が自治都市学校にも貫かれていたといわれている。そこでも、社会階級を異にする生徒たちが隔てなく机を並べて学んでいた、といわれているのである<sup>44)</sup>。この点に関しては、イングランドのブルーム Brougham, H. も、エジンバラのハイスクール在学時代を回想しつつ、「最高と最低の社会階級の人たちが、一緒に教育を受けさせるべくわが子を通学させていた」ことを、同校の顕著な特徴として強調している<sup>45)</sup>。しかし、ヴィクトリア朝中期の自治都市学校が、実利的価値を伴わないかぎり古典などには見向きもしないスコットランドの中産階級に利用される、かれらの学

校であったことは疑いえないのである。

## 結 言

ハーヴィとセラーの報告をまとめると、1866年から翌年にかけての自治都市学校に実際に通学していた生徒 12,601 名の年齢構成は、下表のようになる<sup>46)</sup>。16 歳

8 歳以下	2,003
8-11 歳	5,088
12-15 歳	4,759
16 歳以上	751

になると大部分の者が学校を去っていたのである。そしてさらに、自治都市学校を出た者のほとんど全員が、大学を尻目に実社会に飛び込んでいた<sup>47)</sup>。とすれば、ヴィクトリア朝中期、いかえればその末期におけるスコットランド自治都市学校は、トーントン委員会によって三層に区分された教育の中の第 2 級教育 second grade of education を、つまりほぼ 16 歳で職に就こうとする者のための、近代的教科の教育を本領とする学校であった、と見ることもできるであろう。

## [注]

- 1) Kellas, J.G., *Modern Scotland*, 1968, pp. 43-4.
- 2) Morgan, A., *Rise and Progress of Scottish Education*, 1927, p. 25.
- 3) Education Commission (Scotland), *Third Report of Her Majesty's Commissioners appointed to inquire into the Schools in Scotland* (以下 3rd Rep., Vol. I), 1868, p. 1.
- 4) このことは、1496 年に、富裕な貴族と地主のすべては長男を 8 歳または 9 歳から文法学校に入学させ、「完全なラテン語」を身につけるまでかれをそこに留まらせなければならない、と規定する法律がスコットランド議会で制定されている事実 (Cowan, I.B., *Church and society, Scottish Society in the Fifteenth Century*, ed. by Brown, J.M., 1977, p. 125) から、察するに難くない。
- 5) 3rd Rep., Vol. I., p. 2.
- 6) Smout, T.C., *A History of the Scottish People* (Fontana edition), 1972, p. 27.
- 7) Steven, W., *The High School of Edinburgh*, 1849, p. 3.

- 8) Edgar, J., *History of Early Scottish Education*, 1893, pp. 115-6.
- 9) Morgan, A., op. cit., p. 76.
- 10) 3rd Rep., Vol. I., p. 7.
- 11) Grant, J., *History of the Burgh Schools of Scotland*, 1876, p. 97.
- 12) Smout, T.C., op. cit., p. 438.
- 13) Morgan, A., op. cit., p. 28.
- 14) pp. 13-4.
- 15) Steven, W., op. cit., pp. 128-9.
- 16) Edgar, J., op. cit., pp. 122-4.
- 17) Education Commission (Scotland), *Report on the State of Education in the Burgh and Middle-Class Schools in Scotland* (以下 3rd Rep., Vol. II), 1868, p. 146.
- 18) Morgan, A., op. cit., p. 83.
- 19) Grant, J., op. cit., p. 162.
- 20) Steven, W., op. cit., pp. 101-2.
- 21) Grant, J., op. cit., p. 169.
- 22) 3rd Rep., Vol. I, p. 33.
- 23) Law, A., *Education in Edinburgh in the Eighteenth Century*, 1965, pp. 77.
- 24) Steven, W., op. cit., pp. 119-20. ちなみに、エジンバラ大学は、もともと「市の大学 the Town's College」として出発した経緯から、1583 年の創立以来、1858 年に同年の大学法 Universities (Scotland) Act によって自治が認められるまで、カリキュラム編成や教授の任免などを含む重要権限すべてを、エジンバラ市参事会に握られていた (Balfour, G., *The Educational Systems of Great Britain and Ireland*, 2nd ed., 1903, p. 281).
- 25) Morgan, A., op. cit., p. 77.
- 26) Knox, H.M., *Two Hundred and Fifty Years of Scottish Education*, 1953, p. 12.
- 27) Strong, J., *A History of Secondary Education in Scotland*, 1909, p. 160.
- 28) Law, A., op. cit., App. V., p. 227.
- 29) Steven, W., op. cit., p. 175.
- 30) Smout, T.C., op. cit., p. 445.
- 31) 3rd Rep., Vol. I., p. 34.
- 32) Knox, H.M., op. cit., p. 13.
- 33) *ibid.*, p. 11.
- 34) Kerr, J., *Scottish Education*, 1913, p. 5.
- 35) 3rd Rep., Vol. I., pp. 35-7.
- 36) 角替弘志 スコットランド教育史 (世界教育史大系 8) 昭 49, 216-7 頁.

- 37) Scotland, J., *The History of Scottish Education*, Vol. I., 1970, p. 212.
- 38) Schools Inquiry Commission, *General Reports of Assistant Commissioners*, 1868, pp. 51-2. なお、フィアロンは、「女子の存在は男子を洗練かつ刺激し、男子と一緒に学ぶ機会は女子の判断力を強化し、精神的諸能力を奮い起こす」と共学を推奨する (ibid., p. 57) 立場から、スコットランドの自治都市学校で女子が男子と同じ教室に出席していたことに、特別の注目を喚起しているのであるが、自治都市学校のすべてが女子に門戸を開放していたわけではなかった。かれ自身も報告している (ibid.) 通り、エジンバラ、グラスゴーおよびアバディーンの自治都市学校は、女子を完全に締め出していた。さらに、女子の入学を認める自治都市学校の中にも、共学制ではなく別学制を採っている学校があった。
- 39) ibid., pp. 22-3.
- 40) Strong, J., op. cit., pp. 179-181.
- 41) 3rd Rep., Vol. I., pp. 254-5, 259.
- 42) ibid., p. 116.
- 43) Schools Inquiry Commission, op. cit., p. 242.
- 44) Wade, N.A., *Post-Primary Education in the Primary Schools of Scotland*, 1939, p. 29.
- 45) Grant, J., *Old and New Edinburgh*, Vol. II., 1882, p. 114.
- 46) 3rd Rep., Vol. I., pp. lxxvi-lxxviii, 248-64.
- 47) 3rd Rep., Vol. II., pp. 6, 70, 83, 121, 295.